

PV内に血流を認めず Fogarty balloon catheter で血栓を除去するも完全には除去できず、末梢の細静脈にも血栓が存在した。ヘパリンによる抗凝固療法を開始、新たな壊死腸管出現の可能性から閉腹せずに手術を終了、約12時間後 second look 手術で壊死腸管のないことを確認し閉腹した。6週後の造影CTにてSMVおよびPV内の血栓は消失し、現在ワーファリン内服にて再発兆候なし。

17 大腸癌術後に異時性の肝転移と副腎転移をきたした1例

羽入 隆晃・若桑 隆二・植木 匡

石塚 大・生天目信之

新潟県厚生連刈羽郡総合病院外科

症例は63歳男性。平成10年8月11日、上行結腸癌の診断で右半結腸切除術を施行した。病理組織学的所見は粘液癌＝中分化腺癌，mp，ly0，v0，n0の所見であり、遠隔転移を認めず病期はstage Iであった。

術後2年目の腹部CTで肝S7領域に転移を認め、肝右葉切除術を施行した。更に2年後の腹部CTで下大静脈背側に30mm大の副腎転移を認め、右副腎摘出術を施行した。両腫瘍とも病理組織学的に原発巣と類似した粘液癌であり、大腸癌の転移と診断した。その1年3ヶ月後に肛門部再発による閉塞性黄疸が出現し、ステント留置により狭窄解除を行った。その後、再狭窄のためPTCDチューブにより内瘻化した。現在、外来にて化学療法を施行し、副腎切除後より2年6ヶ月経過して生存中である。

副腎転移切除の本邦報告例は28例と比較的少なく、若干の文献的考察を加え報告する。

18 腹腔鏡補助下結腸切除術を日常的な術式にするまで

山崎 俊幸・桑原 史郎・大谷 哲也

片柳 憲雄・山本 睦生・斎藤 英樹

新潟市民病院外科

当院では腹腔鏡下結腸手術を導入以来3年を経過、症例数は90例に達して現在恒常的に施行さ

れている。適応は2002年に良性疾患・早期癌で開始、2003年mp癌に広げ、2004年からはss癌に拡大した。大腸癌74例、その他の大腸/小腸疾患各々13/3例。開腹移行は3例。合併症は27例(31%)で、創感染12例、イレウス7例(うち再手術2例)、縫合不全3例(うち再手術2例)等であった。早期癌38例・進行癌36例で、観察期間は短いが治癒切除例の再発なし。内側アプローチを基本とし、平均手術時間は右側133分、左側172分(低位前方切除術7例を含む)、全例では150分であった。術後在院日数中央値9日で、現在は7日に設定している。80例の時点から出張医にも術者としての指導を開始した。